

私の研究履歴 —社会心理学と40年—

吉 田 俊 和

はじめに —心理学との出会い—

10月末が原稿の締め切り期限だと言われ、いつものように慌てて書いている原稿です。若い頃は、もう少し早くから構想し、それなりに満足のいくまで内容や文章を推敲していたのですが、いつものまにかぶつければ本番が当たり前ようになってしまいました。今回も、半年前から予定されていた原稿なのですが、他の仕事や雑務をこなしている間に、残り10日を切る時期になってしまったのが実情です。とはいえ、教育心理学教室（昔からの名前が好きです）で行う最後の仕事を遅らせないように、必死に筆を進めます（キーボードを叩きます）。以上、何とも切ないセルフ・ハンディキャッピングです。

私は早熟な高校生であり、社会問題を他の生徒に偉そうに語ることが大好きな人間でした。報道局で新聞作りをし、学校内の「かわら版」を発行して悦に入っていました。名大附属高校在学当時の校長先生（名古屋大学教育学部の教授です）のインタビュー記事で、あだ名を付けてしまい、生徒会担当の先生からこっぴどく叱られた記憶があります。当然、職業も新聞記者をめざすということで社会学を勉強すると豪語していました。高校3年の5月頃、栄の丸善ギャラリー（当時は栄の丸善ビル内）で、「人間とは何か」という写真展を見に行き、世界の著名な写真家たちの力作（戦争や貧困）を見ましたが、生意気にも「こんなモノでは人間や社会はわからない。もっときちんと（理論的に）説明すべきだ」と偉そうなことを、一緒に出かけた友だちに言っていたようです。その直後、教育実習期間が始まり、文学部で社会学を学んでいる実習生と親しくなり、自分の思いを伝えました。ところが、その実習生から思いがけなく「心理学」の話聞き、しかも、「人間の心理学を学ぶなら、教育学部へ行った方がよい」と言われました。これが、心理学という学問を勉強してみようと思ったきっかけです。当然のごとく浪人し、1年間「河合塾」へ通った後、教育学部へ入学しました。この年は、「東大安田講堂攻防戦」が1月にあり、建物の封鎖が続いていた東京大学や東京教育大学（現在の筑波大学の前身）の入試が中止となり、「受

験戦線異状あり」でしたが、何とか教育学部へ入学できました。入学してもキャンパス内は騒がしく、9月からは、当時の教養部棟（現在の全学教育棟）が全共闘系の学生に封鎖され、授業も全てできなくなりました。高校時代から社会問題を偉そうに語っていた私は、人並に学生運動にも首を突っ込み、新聞記事が正しく事実を伝えていないことに失望し、同じ新聞社でも、文化部で映画評論を書いてみたいと思った時期もありました。まさに、大学1年次は、自分の理想と現実社会とのギャップに右往左往していただけの、学問とは無縁の時代でした。

大学時代（1969～1973）

名古屋大学では、12月に封鎖が解除されると、学生運動がしだいに沈静化しました。その後、3月末まで後期の授業があり、全学部の教室を使用しての授業には参りました。2年時の4月から、教養部で「心理学実験」が始まり、データを集めて、そこから何かを言うということが自分の指向に合致したらしく、心理学を面白いと感じ始めました。そのころ、兄の高校時代の友人である速水先生にも出会い、学校現場での実験に補助員として同行し、修士論文のデータ収集に協力するうちに、ますます心理学に興味を抱くようになりました。勢い余って、必修の教育原理の時間に、「家庭教育」という本を読んで議論した折、著名な教授が書いた文章に、「データもなしに自分の見解を述べているだけで、説得力がない」と言ってしまう、「そういうことをいうものではありません」と、グループ担当の助手にたしなめられた記憶があります。後日談ですが、その時の担当助手だった先生が私の赴任先に非常勤講師として来られたときに、偶然顔を合わせるなり、「あの時の吉田君?!」と大きな声を上げられたのには閉口しました。よほど生意気な2年生だったのだと思い知らされました。心理学に傾倒していくのに決定的だったのは、2年後期の調査法や検査法でした。同時に、教養部で辻敬一郎先生が開講されていたゼミのような授業に参加し、相良守次編「現代心理学の諸学説」の担当章をレポートしたことでした。社会心理学という学問を意識したのは、この時です。

担当章として社会心理学の章を選択したので、調査法を担当されていた助手の植村勝彦先生（専門が社会心理学）に、「参考になる本を教えて欲しい」と依頼したら、三隅二不二先生が翻訳されたカートライトとザンダーの「グループ・ダイナミクスⅠ、Ⅱ」（Cartwright, D. & Zander, A., 1960）を貸してくださいました。この本を読み始めて、まさしく私の頭脳に「ビビッ」と稲妻が走りました。レヴィン流の社会心理学研究に、すっかり魅せられてしまいました。

3年生からは、当時の教育心理学科に進学し（村上英治先生の面接という関所がありました）、本格的に心理学の勉強を始めました。当時は8人の先生と助手が3〜4人ほどの陣容で、春の野外演習や年末の大掃除とクリスマス会には全構成員が参加し、厳しいけれど楽しい雰囲気漂う教室でした。現在の第5実験は、当時第3実験と呼ばれ、初めての自由研究に挑戦しました。ちょうど隔週で開講されていたので、續恒先生のグループと大橋正夫先生のグループの両方に参加していました。やろうとしたことは、自分の経験に基づく「あせり」現象でした。タイムプレッシャーとパフォーマンスの関連を明らかにする研究でした。附属の中学1年生を教育学部連れてきて、タイムプレッシャーをかけて、知能検査の中にある目と手の協応課題という触れ込みのもと、ピンセットでパチンコ玉を掴んで移動させる作業を行わせました。残り時間の告知（独立変数）に3条件（標準、4分の3、2分の1）を設定し、パフォーマンス（従属変数）がどう変化するかということを検討しました。さらに、個人特性として不安傾向を測定しました。最終実験計画に至るまでに、2人の先生の指導法が全く異なることが面白くてたまりませんでした。續先生は、主に現象をどう捉えて数値化するかに重点を置かれ、「筆圧形を使ったら面白い」などのアドバイスをいただいたのに対し、大橋先生は、現象が理論的な体系の中で、「どのように位置づけられるかを明確にするため、専門書や論文を読みなさい」との指導を受けました。續先生は、最後の帝国大学教授と言われる心理学会の重鎮であり、大橋先生は、新制大学1期生で名大文系初の課程博士学位を取得された新進気鋭の先生でした。3年生の私ごときの研究が、対称的な2人の先生から指導を受けられ、研究者を志向するにあたって、大変有意義な指導をしていただけだと感謝しています。なお、当時の第3実験は春休みなしでデータ付きの論文を書きあげ、4月のガイダンスの前日に、3・4年の学部生、大学院生、教員が全員出席のもとで、学会同様の口頭発表会が行われました。緊張の余り、厳しい指摘を受けると泣き出す学生もいるくらい張りつめた雰囲気がありました。筆者は、予想通り、

村上英治先生から、研究の倫理面を問われ、冷や汗をかいたことを今でも鮮明に覚えています。当時、研究倫理のことはさほど問題とされていませんでしたが、臨床心理学の村上先生だけは、そういう点に手厳しかった記憶があります。おかげで研究の倫理面については、常に内的なチェックを働かせることができました。

卒業論文は、社会心理学ということで、迷わず大橋先生を選択しました。指導教官の印をもらいに行くと、最初に言われた言葉が「吉田君、大学院へ行くなら研究テーマを変えなさい。面白いと思うだけでは、研究は進まないよ」でした。「他の先生たちからは、高い評価だった」と言われたのに、「なぜ？」と無然たる思いでした。それを見透かされたように、即座に、「あの研究を、どう展開するつもりかね」と言われ、咄嗟に返す言葉がありませんでした。それから、新たな研究テーマ探しが始まりました。今度は、JPS（Journal of Personality and Social Psychology）のような雑誌から、いくつかの論文を拾い上げて読むという作業の繰り返しになりました。そして、辿り着いたのが、「認知的不協和の一般的活性化機能について」というテーマでした。フェスティンガー（Festinger, L. 1957）が提唱した認知的不協和という動機づけ概念が、その低減とは無関連な一般的な動因として機能することを実証しようとするものでした。簡単に言えば、認知的不協和という新しい動機づけ概念が、当時の心理学の主流派であったハル（Hull, C.L., 1943）やスペンス（Spence, K.W., 1960）の動因理論体系の中に位置づけられるのかという理論的なテーマでした。夏休みは、「認知的不協和理論」と「行動の原理」という2冊の翻訳書を、何度も読み返して研究計画を立てていました。古川図書館（現在の名大博物館）が、筆者の研究室でした。余談ですが、大橋先生他の編著で、入門心理学（福村出版、1980）が出版されましたが、第1章心理学とは何かの中で、大橋先生が筆者の第3実験の研究を例（もちろん一部改変）に挙げて、行動科学としての心理学を説明されていたことを、大変誇らしく思いました。

大学院時代（1973～1979）

当時の大学院入試は1月だけにしかなく、27名受験して9名が面接を受け、7名が合格したと記憶しています。筆者は、受験勉強をほとんどしないで（指導教官がしなくてよいと言ったのを真に受けて）、ひたすら卒論に取り組んでいたため、7名中3番であると聞かされたときは、正直ホッとしました。ただし、先生から「面接点が良かったので3番だけど、心理学の得点は散々だね。本当に勉強しなかったのか！」と、叱られました。そんな大学院生の始まりでしたが、入学早々、「夏休み前までに、

卒業論文をまとめて、心理学研究に投稿しなさい」、「自分の研究だけでは視野が狭くなるから、共同研究に参加しなさい」言い渡されました。この共同研究が半端でなく、研究会の準備、終わった後の食事会の予約、実験や調査の実働部隊、データの管理や分析等、授業のレポーターと重なると悲劇でした。とにかく、身近で書いている人が少ない投稿論文を執筆しなければならない。加えて当時の心理学研究は、英文アブストラクト150語の他に、500語のサマリーを作成する必要がありました。夏休み前までは、本当に朝の9時から夜の9時頃まで、年中無休状態で走り続けていました。そのかいあって、1回の修正で自分の書いた論文が「心理学研究」に採択された時は、嬉しかったです。業績ができたという意識ではなく、単純に自分の研究が認められたという感覚でした。しかし、1年間サボっていたわけではないのに、肝心の修士論文の構想は何も進みませんでした。すると、2年次の4月に研究の進捗状況を報告に行った折、大橋先生から「吉田君、君は修士課程を3年間やる予定なのか」と言われ、背筋が冷たくなりました。今度も、また必死で次の研究計画を立て、何とか卒業論文の延長線上で修士論文を書き終えました。こんな書き方をすると、大橋正夫先生は冷徹な指導教官に思われてしまいますが、筆者が研究者となる道筋を付けてくださった大恩人であり、人間的な親しみやすさと研究面での厳しさを教えていただきました。筆者にとって、人生の中で、他の誰よりも全人格的な影響を受けた先生だったと思っています。

博士課程（当時は別課程）に進学すると、研究面では、スランプに陥りました。修士論文も心理学研究に投稿し、順調に採択されたので、査読付き論文2本を持ち、今なら「課程博士」の最右翼というところですが、当時の博士学位は、もっともっと雲の上のような存在で、微塵も考えませんでした。何よりも、選んだテーマが理論的すぎて、筆者の好みでないということがありました。筆者が博士課程3年(1977年)時に、大橋先生がUCLAのケリー(Kelley, H.H.)教授のところへ在外研究員として留学されました。「夏休みに来ないか」と言われたので、藤田達雄(名古屋短期大学)・津村俊充(南山大学)の両氏と大学1年生の姪御さんを連れた4人で、ロスへ旅立ちました。当時は1ドル270円超の時代で、安い切符を探しても、往復旅費が20万円を軽く超えていました。向こうでは、ご家族と一緒にアパート(と言ってもバスルームが3つある豪邸です)に3週間ぐらい滞在して、あちこち出かけました。その間に、大橋先生がケリー教授と大学院生の3人で、毎週行われていた帰属理論のレビュー勉強会に参加させていただきました。UCLAの研究室で、

ケリー教授に自分の研究(500語のサマリーを持っていき)を説明してコメントをもらったことは、貴重な体験となりました。翌年、ケリー教授とドイツ(Deutsch, M.)教授が来日され、日本グループ・ダイナミクス学会主催の国際シンポジウムが京都の国際会議場で行われました。その直後に、名古屋大学でもミニシンポジウムが行われ、鹿内啓子氏(北星学園大学)、諸井克英氏(同志社女子大学)と筆者の3人が英語で発表を行いました。この頃、自らの研究も大きな岐路に立っていました。自分は、心理学研究2本掲載ということで、教育学研究科初の日本学術振興会特別研究員(当時はPDのみ)でしたが、もちろん学位は取得していません。前年、心理学研究のアブストラクトがPsychological Abstractsに掲載されたのか、何人かの海外研究者から印刷物の請求がありました(電子メールがない時代です)。その中に、ザイアンス(Zajonc, R.B.)からのがありました。私の中では、著名な研究者というイメージがあったので、「なぜ?」と思い、彼の研究を辿っていくと、社会的促進(Social Facilitation)の概念を発見しました。筆者の頭脳に、2回目の「ビピツ」という稲妻が走りまわりました。とにかく、夢中で関連する文献を集めて読みあさりまわりました。もう一方で、ケリー教授と出会ったことで、帰属理論の研究にも興味が湧き、どうしようかと葛藤状態でした。しかし、迷っている1年ぐらいの間に、日本の多くの研究者が帰属理論の研究を始め、流行の嫌いな筆者は、社会的促進に軸足を置き始めました。この年、初めて社会的促進に関する実験を、非常勤先の南山短期大学で実施しました。特別研究員として、まずまずの給料をもらえるので、あと2年間頑張って学位論文のデータを収集してみよう、と思っていた矢先に、名城大学に就職するよう諭されました。10年間慣れ親しんだ場を去ることは、勇気の要ることでしたが、次のステップへ一歩踏み出しました。

名城大学時代(1979~1985)

この時期は、せっかくやり始めた社会的促進の研究も、教職課程の授業が中心のポジションでは、実験室もなく、一時停止を余儀なくされました。赴任当初は、全く異なる環境に戸惑いました。就職すると、教科書的な原稿のお誘いが多く、自分の授業用の原稿を兼ねて、何編か書き留めました。もう一方では、共同研究のメンバーとして研究アイデンティティを確保することに重点を置きました。大橋先生のチームで行った最後の大きかりな研究である附属中学校で実施した「中学生の対人関係の追跡的研究—センチメント関係と学級集団構造—」に積極的に関わった(毎週データ収集に赴き、生徒たちの面接も

行った)。さらに、教員としての立場から「大学における教師と学生の人間関係」というテーマに興味を覚え、調査を実施しました。2つの研究は、いずれも大橋先生が、ご自分の余命を意識しながらであったことを後に知り、最後に積極的に関わって良かったと思っています。存命中は会うたびに、「いつになったら学位を書くのだ!」とおっしゃっていたのは、ご自分の余命を伏せての叫びであったとは、知らなかったこととはいえ、自らの不明を恥じています。1983年は、大橋先生が不帰の客となられた年であり、頑張りすぎた義兄も悪性腫瘍で亡くなり、筆者自身の中で頑張ることが虚しく思えた年でした。留学するために続けていた英会話学校も、十二指腸潰瘍の悪化を理由に止めてしまった厄年でした。このことがあり、結局、一度も留学する機会を得ずに、完全な国内派になってしまいました。1年ほどの間は、自分の中から本当に気が失われたことを実感していました。しかし、転機は意外と早く訪れました。

三重大学時代 (1985~1994)

1978年から三重大学教育学部へ非常勤講師に出かけていました。その非常勤先から、思いがけなく「公募があるから応募しないか」と言っていた。名城大学に就職してからは、遠いから辞めたいと2回ほど申し出たときに、大橋先生から「向こうがもう結構ですと言うまでは、行きなさい」と言われた意味がようやく理解でき、あらためて天国の先生に感謝しました。三重大学の教育学部は、8年間通った非常勤先でしたので、教室メンバーの先生とも顔見知りで、卒業論文を書いている学生からの相談も受けたりして、最初から仕事のやりやすい職場でした。久しぶりに実験室も使用できる環境ができ、さっそく中断していた社会的促進の研究を再開しました。「他者の存在がパフォーマンスに与える影響」という現象に興味を持つ学生も毎年のように現れ、筆者自身も精神的に蘇りました。社会的促進研究も実験室に留まらず、授業場面というフィールドにも出かける学生が出て来て、こんなに楽しく研究ができてよいのだろうかという満足感で一杯でした。

この時期は、もう一つのテーマを持ちました。教育学部なので、親子関係やきょうだい関係に興味を持つ学生も多く、意識的に研究材料を探していました。ちょうど、長田雅喜先生が編者となり、大橋先生ゆかりの人たちで「家族関係の社会心理学」という本を出版することになりました。そのときに、筆者は「きょうだい関係」の章を選択し、双子きょうだいの社会的促進について記述した。筆者は自分の子どもの観察から思いついたことを執筆しただけなのに、何とあのザイアンス教授は、「きよ

うだいの数」や「きょうだいの出生順位」が知能の発達に関係するというような研究発表をしていることを知り、ますますザイアンスという研究者に興味を抱きました。きょうだい研究としては、廣岡秀一氏(故人)や斎藤和志氏(愛知淑徳大学)らと共同で、3編の業績を得ました。この研究は、筆者にとってサイドワーク的研究でしたが、子育て系の雑誌から原稿依頼が数多く来たり、団子きょうだいの歌が流行ったときには、「アエラ」からも取材が来て、きょうだい研究の専門家のように扱われたのが可笑しかったです。社会的促進に関する研究も、久しぶりに学会誌に投稿しました。学会誌への投稿は10年ぶりぐらいだったので、初めての投稿時より緊張して書いた記憶があります。さらに、この時期には、将来的に自分の中核研究として位置づけることのできた「社会的迷惑研究」の源になるような発想が生まれていました。大学内や近鉄の駅構内での自転車駐輪問題、援助行動より他者に対する配慮行動など、日常的に学生に語っていたことが、後々大いに研究のモチベーションを高めてくれました。三重大学の9年間は、良い思い出が多い時代でした。特に、西川和夫先生のゼミとは、研究交流やポウリング交流を通じて、指導生たちが切磋琢磨し、教員養成大学の教育指導法としては、一つのモデルになるものであったと自負しています。研究とは何の関係もありませんが、三重大学時代に、西川先生に海釣りのコーチングをしてもらい、心身の健康を維持するための趣味を覚えました。また、三重大学医療技術短大(現医学部看護学科)へ赴任された河合優年氏とは、名古屋からの道すがら、お互い気兼ねなく本心を語り合える友として、三重大学時代をより楽しくさせていただいたことには大変感謝しています。この太平を打ち破る出来事が、1993年の夏に起きました。この年は冷夏で、夏だというのに、雨ばかり降っていて、米の生育に異変が起き、海外から緊急輸入をした年でもありました。

大橋先生の後任であった原岡一馬先生が、この年の3月に退官され、後任人事が始まっていました。第三者的に関心のあった人事でしたが、いつのまにか自分が渦中の人間となり、決断を迫られることになりました。心の準備もないし、学位も取得していないし、能力にも自信がないので、現状に満足しきっていた身としては、敢えて火中の栗を拾う気になれませんでした。最初は固辞しましたが、1ヶ月ほど悩んだ末、大橋先生が礎を築いてくださった名古屋大学の社会心理学を、誰かが受け継がないと…の一心で、まさに出家するような気持ちで引き受けました(三重大学での楽しくて平穏な日常性を断たないと、務まらないと覚悟しました)。それでも最初は、10年ぐらい頑張っ、誰かにバトンタッチすればよい

と思っていたのが偽らざる本心でした。その当時は、19年間も長居するつもりはまったくありませんでした。

名古屋大学時代（1994～2013）

前期（1994～1998）

即戦力としての採用だということは自覚していましたので、教育心理学教室の運営にも積極的に関わりました。大学院生も、いきなり6名を抱えることになり、毎週土曜日の午前、指導会を始めました。卒論生5名に対しても、定期的に指導会を開催したので、学生は戸惑っていました。また、共同研究を主催して大学院生の育成をしなければいけないと思い、松原敏浩先生（愛知学院大学）に誘われて「学校組織の社会心理学的研究」を始めました。それにプラスして、毎日、午後6時から9時までの時間帯は、学位論文の執筆に当てました。明らかに気負い過ぎでした。無理がたたると、12月に入ると、腎盂炎や肝機能の低下などと診断され、八事日赤から入院を勧められました。しかし、卒業論文の指導もあるからと断り、その後2ヶ月近く通院するはめになり、体調管理の大切さを痛感しました。

結局、博士学位論文は翌年の10月に完成しました。タイトルは、『社会的促進過程に関する研究』であり、骨格をなす研究は三重大学時代に行われたものです。「他者の存在が個人のパフォーマンスに与える影響」という一見単純な現象を説明するのに、いくつもの立場があり、それを心理学における人間観の違いにまとめたのが図1です。簡単に説明すると、ザイアンスが1965年のサイエンス誌で提唱した「他者の単なる存在」仮説は、Hull-Spenceの動因理論を援用し、社会的促進現象を初めて理論的かつ明快に説明したものです。彼の研究で想定されている人間観は、行動主義そのものです。他者の存在は、遂行者にとって外からの刺激であり、その刺激によって遂行者の動因水準はオートマティックに上昇

し、それが反応の生起確率を決定していくというものです。これに続くコットレル（Cottrell, N.B., 1972）の「学習された動因源」仮説は、他者の存在がザイアンスの仮説で仮定されているようにア・プリオリに遂行者の動因水準を高めているわけではないことを主張しています。すなわち、遂行者は他者に関する手がかり情報を吟味し、見物者や共行動者が自分を評価する懸念を感じた場合にのみ、動因理論的メカニズムが生起することを仮定しています。ここでの人間観は、ザイアンスの仮説では遂行者が全く受動的な遂行者であったのに対し、手がかり情報の吟味という能動的な認知活動を行うことを前提としています。さらに、サンダース（Sanders, G.S., 1981）の注意のコンフリクト仮説は、認知心理学的発想を取り入れたものです。遂行者は、見物者や共行動者に注意を向けるのと同時に、遂行課題にも注意を集中しなければならず、両者の間にコンフリクトが生じて、遂行者の動因水準は上昇します。この仮説における他者の存在は、遂行者にとって妨害子として働き、そのインパクトの大きさが遂行者の動因水準の上昇をもたらしています。理論的には、評価懸念をもたらすような他者は、妨害子としてのインパクトの大きさを示すものとして処理されません。これら3つの仮説は、前提条件の違いはあっても、他者の存在が遂行者の動因水準をオートマティックに上昇させ、それが反応の生起率を決定していくという動因理論的なメカニズムに依拠するという点では、共通性を持っています。

これに対し、自己客体視説では、他者の存在という外からの刺激は、遂行者が自己に注意を焦点づけるための「触媒」と考えられています。自己に焦点を向けた結果、遂行者は遂行水準についての評価過程を始動させることとなります。その際、遂行者は、理想水準と現実の遂行水準のズレを意識し、パフォーマンスを増大させることによって、そのズレを低減しようと試みるのが仮定さ

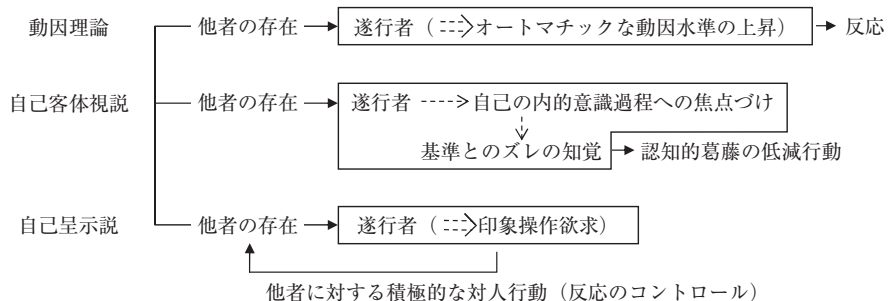


図1 社会的促進現象を説明する諸理論の概念図

れています。この説での人間観は、自己の内的意識過程が最も重視されています。そして研究自体も、いわば、遂行者の認知的葛藤の低減行動を問題としています。この考え方は、1950年代の後半から60年代に数多く研究された認知的斉合性理論の流れをくむ人間観と相通じるものがあります。

もう一つの自己呈示説では、見物者や共行動者に対して、遂行者は、反応を自由にコントロールしていく主体として捉えられています。つまり、遂行者は存在する他者に対して、自らの印象を最大限よく見せるため、積極的な対人行動を行う主体と考えられています。ここまでは、博士課程の3年次から取り組んだ研究の最終成果です。

この時期、痛切に感じたことは、日本の心理学の国際化です。速水先生に誘われて、モンテリオールで開催された1996年のInternational Congress of Psychologyに参加したところ、日本人の参加者の多さにびっくりしました。明らかに、プラザ合意後の円高の影響が大きいと思われる。20年近く前に自分がUCLAに出かけた頃とは様変わりでした。さっそく、翌年に京都で開催された第2回のアジア社会心理学会では、博士課程後期課程以上の指導生は、全員発表を義務づけました。何しろ今と異なり、全員が初めての英語発表なので、かなり前からお互いに英語で質問し、英語で答えるという練習をして臨みました。2年後の台北、4年後のメルボルンでは、前期課程の大学院生も参加し、もはや海外発表は当たり前の規範が作られたのは、大変良かったと思っています。国内派の筆者にしては、よくやったと思っています。

大学院生の指導会は、2年目からは藤田先生、廣岡先生、斎藤先生にも参加をお願いし、学位(Ph.D.)を取得するゼミナールの意味で「Dゼミ」と呼ぶようになりました。年々、大学院生も増えていき、指導会に活気が出てきました。毎年、夏の釣り宿泊や我が家でのお正月宴会では、アルコールの消費量も半端でなく、その分だけ凝集性も高い集団となっていったと信じています。Dゼミ出身学位取得の第1号は、1998年秋、山中一英氏(兵庫教育大学)でした。同年、森久美子氏(関西学院大学)も取得しました。いずれも課程博士であり、大学院大学になるための実績にご協力いただきました。そして、1999年3月、橋本剛氏(静岡大学)が、研究科で初めて後期課程3年で学位取得修了を果たし、専攻全体に大きなインパクトをもたらしました。これも、大学院改革の一環で、従前のような学位ではなく、基準を満たせば積極的に取得してもらおうという方向性を作成できたことがよかったと思っています。この辺りまでが、名古屋大学時代の前期といえます。

中期 (1998~2007)

1998年からは、いよいよ筆者があたためていた「社会的迷惑行為」の研究会を開始しました。最初のテーマは、人々が社会的迷惑行為をどのように認知(構造化)しているのか、どのような個人特性を持つ人たちが迷惑を感じやすいのか、についてでした。次に行ったテーマは、人々が感じる社会的迷惑の根拠がどのような理由に基づいているのか、についてでした。第三のテーマは、社会的迷惑行為に対する対処方略は、各個人が持っている

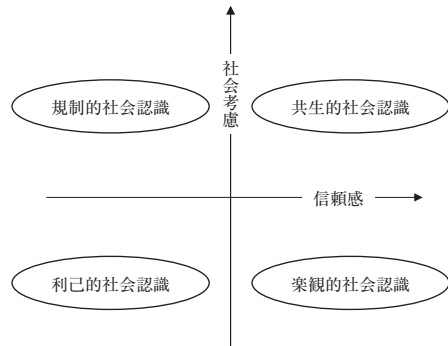


図2 社会考慮・信頼感と社会認識の関係

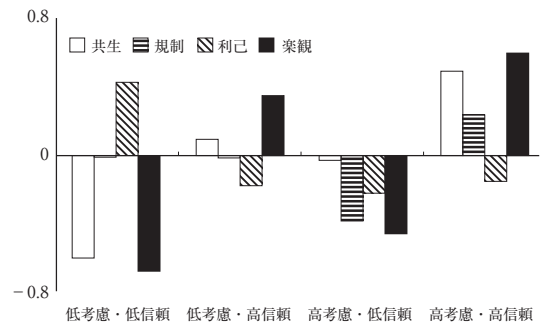


図3 4分類による各社会認識尺度の標準得点の比較

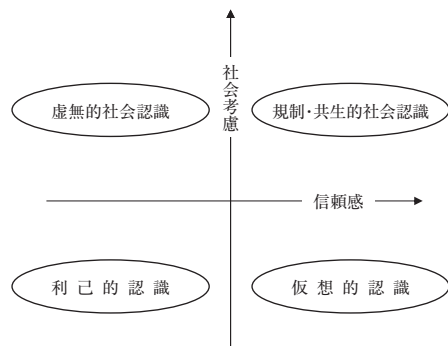


図4 社会考慮・信頼感と社会認識の関係 (修正版)

る社会考慮や社会認識とどのように関連するか、についてでした。特に三番目にテーマには思い入れがあり、元吉忠寛氏（関西大学）や北折充隆氏（金城学院大学）と3人で、筆者の研究室で遅くまで語り合っていた記憶があります。他者に対する信頼感と社会考慮得点の組み合わせから、図2のような4群が構成され、それらの人々は、社会認識が異なるので、社会的迷惑行為に対する対処方略が異なるであろうというのが、仮説でした。しかし、図3のような結果が得られ、社会考慮が低い人たちは社会認識と呼ぶほどの「社会」を持っていないので、図4のような修正版が提案されました。

1999年の晩秋から、社会的迷惑行為研究の予先が大きく変わることになりました。筆者が附属中学校から「心の教育」実施の依頼を受けて、「迷惑行為の抑止」と「心の教育」は、繋がっているのではないかという議論のもと、2000年4月から、附属中学校1年生に対し、年間30時間の授業を行うことになり、その教材作成を行いました。研究会のメンバーも増えてきたので、研究会の分科会のような形で始めましたが、3年間は真剣勝負の連続でした。大きなコンセンサスは、「人の行動のしくみ」、「対人関係」、「集団や社会」に関して得られた社会心理学的知見を体験させることにより、社会的コンピテンス（対人関係能力、集団や社会への自律的適応力等）や社会志向性を養うことを目的とするだけでした。具体的な授業内容は、1回1回が手作りでした。例えば、行為者と観察者では、原因の帰属が異なるという知見を、図5のようなサッカー選手とテレビ観戦のファンのような例話で考えさせるような授業でした。我々が議論して決めた授業内容を1回ごとに附属の先生方と調整（意見を聞き）し、授業時まで修正して実践し、次年度からの附属中学校教員による実践に向けて、再度、修正する。この繰

り返しを1年間続けました。持ち上がりで、2年次には2年生に対する10時間分の授業教材作成と、附属学校の先生が1年生に行う前年作成した授業内容の点検と指導。3年次には、3年生に対する10時間分の授業教材の作成と、附属学校の先生が2年生に行う前年作成した授業内容の点検と指導。4年次には、附属学校の先生が3年生に行う前年作成した授業内容の点検と指導で、あっという間の4年間でした。その成果は、教室で学ぶ「社会の中の人間行動」（明治図書、2002）、学校教育で育む「豊かな人間関係と社会性」（明治図書、2005）に集約されています。教育心理学会でのシンポジウムでも大きな反響があり、5県の教育委員会の研修会で講演する機会を得ました。これが縁となり、2004年4月から附属中・高等学校の校長に就任しました。2001年から続いていた大学評議員の仕事、日本社会心理学会や日本グループ・ダイナミックス学会での活動も重なり、最もハードな時期でした。しかし、附属学校で起きた「騒動」の責任をとる形で、2005年の6月に辞任することになった時は、パーアウト寸前でした。半年ほどは、なぜこういう事態になったのかと反芻しながら、うつ状態に陥りました。当時の研究科長であった村上隆先生には、大学執行部との板挟みから、多大なご迷惑をおかけしてしまい、先生自身の早期退職の遠因になったのではないかと自責の念で一杯です。名古屋大学の勤務も10年を超えたので、そろそろ自分も辞め時かと異動先を真剣に考えました。

一方では、「社会的迷惑行為」研究も関連研究が増え、この年の4月から日本学術振興会の科学研究費基盤研究(B)に採択されていました。局面打開は研究しかないと思い、いつ自分がリタイアしてもよいように大学院生の研究指導を加速させました。2006年から2007年は再び充実した2年間を過ごすことができ、2007年のアジア



図5 例話漫画

社会心理学会（於：マレーシア）では、日本グループ・ダイナミクス学会会長として、英語でスピーチの緊張感も味わえました。これが、最もハードで充実していた時代、名古屋大学の中期でした。

後期（2008～2013）

2008年4月、妻に悪性腫瘍が見つかり、生活が暗転しました。それでも、大学院生は存在するので、大学にいる間は努めて研究に専念しようと思いました。目標は、自分の一番大事な研究であった「社会的迷惑行為」に関する専門書の出版でした。研究開始の頃から、ナカニシヤ出版の編集長穴倉由高氏との約束であり、この出版の後、セレクション心理学（サイエンス社）の執筆に取りかかる予定でした。幸い、筆者の還暦祝い（2009年9月）の前に、『社会的迷惑の心理学』は出版できました。研究にかかわってくれた11人の執筆者に1章ずつ担当していただきました。全体像は、図6に示す内容です。ただ、残念だったのは、編者の1人となる予定であった廣岡秀一氏が、2007年の夏、50歳の若さで他界されたことです。斎藤和志氏と共に、Dゼミの創生期を支えてくれた戦友ともいべき人を失った悲しみは、簡単には払拭できませんでした。それから1年、妻の闘病生活と付き合ううちに、自分の気力と体力が急速に失せていくことを

自覚するようになりました。現在も、吉澤寛之氏（岐阜聖徳学園大学）らと2006年秋から続けている「社会環境が子どもの社会化に及ぼす影響」の共同研究も2回目の科研費を獲得して継続中です。また、2009年秋からは、三島浩路氏（中部大学）らと共同で、KDDI研究所の協力を得て「ネットいじめに関する研究」も行っています。いずれの研究も、代表者ということになっていますが、実質的には先頭に立って旗を振っているわけではありません。吉澤氏や三島氏の助力がなければ、研究の前進はおぼつかない状態です。還暦というのは、「そろそろ第一線を退きなさい」という天の声だと実感しています。もちろん、研究者としての筆者には、まだ別の役割や価値はあると思っています。10月からは、Dゼミの出身者である五十嵐祐先生が着任され、今後は、新しい時代がやってくると思われれます。院生諸君は、前期・中期・後期のどこで筆者と出会ったのかによって、教員としての筆者の印象は全く異なるかもしれませんが、その時々で一番必要と思っていたことを、みなさんに伝えたつもりです。社会心理学が、この40年でずいぶん進化してきたように、名古屋大学の心理発達科学専攻（教育心理学教室）も、どんどん進化していくことを期待して、筆を下ろしたい（キーボードを叩くのを止めたい）と思います。

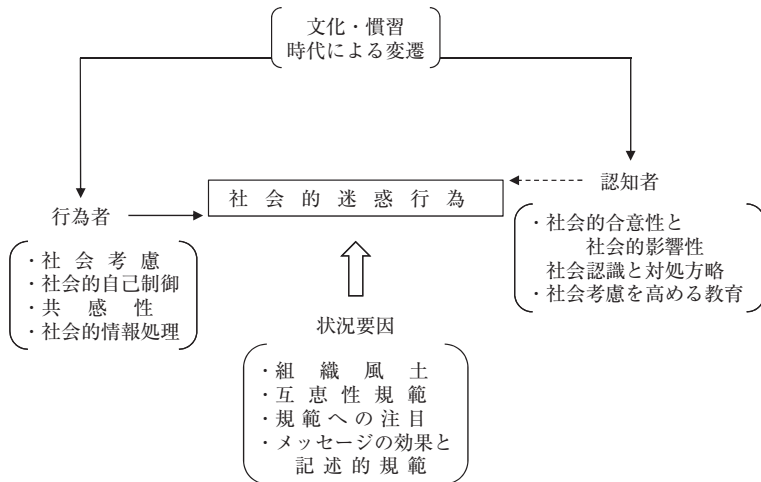


図6 社会的迷惑行為に関する研究の全体像